

ダンクセキ [印刷・製本会社]

Dank seki

面付けいらずで検品時間も大幅に短縮。

これまでのデジタル印刷機より、

DreamLabo 5000 のコストメリットは大きい。

CLIENT Interview

DreamLabo 5000



長野県長野市にあるダンクセキ株式会社は、2016年7月に創業70年を迎えた印刷・製本会社です。

もともとは製本会社としてスタートした同社は、持ち前の製本技術にデジタル印刷を組み合わせ、早くからフォトブックに参入。当初はコンシューマー向けインクジェットプリンタで行っていたプリントは、その後、レーザープリンタ、液体トナータイプのデジタル印刷機という変遷を経て、現在はDreamLabo 5000 に到達。フォトブックの自社ブランド「PhotoRevo」の出力は、導入直後にDreamLaboに切り替えました。

フォトブックに対して、厳しい目を持つダンクセキは、キヤノンのハイクオリティ・オンデマンド印刷機DreamLaboをどのように評価しているのでしょうか。ダンクセキ株式会社 代表取締役社長 関武士さん、統括工場長 滝澤秀憲さんにDreamLabo導入の経緯と評価を伺いました。

— DreamLaboを導入された経緯と理由を教えてください。

関 ● 当社のフォトブック事業、そしてフォトブックの市場を広げたいと考えたとき、DreamLaboが

一番適していたからです。

当社は早くからフォトブックに取り組んでいますが、フォトブック市場が広がるとともに、同じような印刷機で、同じようなフォトブックがつけられるようになってきました。そうすると、ユーザーももっといいものを求めるようになります。当社としては一般のユーザーだけではなく、ハイアマチュアやプロの写真家にも当社のフォトブックサービスを使っていただきたいという気持ちがありましたから、DreamLaboがあれば、消費者の品質を求める声にも応えつつ、いままでの品質では満足できなかった顧客層にもアプローチができると思い、導入をいたしました。

滝澤 ● これまでフォトブックの出力に使用していたレーザープリンタや液体トナータイプのデジタル印刷機は、オフセットに近い印刷方法でしたが、DreamLaboはCMYKでなくRGBデータのまま出せるというのもフォトブックには向いていました。これまではRGBで作られたデータをCMYKに変換してもらうが多かったのですが、DreamLaboになればそういうことはなくなり、「モニターで見た色と同じ色が再現できますよ」と言えるようになります。

関 ● ネット通販では手に届くまではどんなふうになるのかわかりませんから、イメージ通りのものを提供することは非常に重要です。写真が銀塩からデジタルに代わり、パソコンやスマートフォンが普及したことで、写真=モニター上のものというイメージを持っている方も多くいますが、そうした方々にとっては、モニタの写真がそのまま出てくるということは、ユーザーのイメージ通りのものが届く、ということにもなります。

滝澤 ● 印刷方式がインクジェットであることもフォトブックには最適です。たとえば写真家の方は自身のモニターで色を見ながら、自分の思う色をプリンタで出力していると思いますが、そのときに見ているのはインクジェットの色ですよね。その色が自分がイメージしている色なんです。

いままでの印刷方式では、「印刷だとこんなものなのかな?」と思うようなこともあったかもしれませんが、DreamLaboで出力することで、ユーザーが思い描いた通りのものができあがるようになるんじゃないかと思えます。

— DreamLaboの品質がほかのデジタル印刷機と比べてすぐれていると感じる点はどこですか?

滝澤 ● これまでの印刷方式に比べて、全体的なクオリティが非常に高いのですが、特に黒やグレーの発色がすばらしいですね。黒はCMYKベースのデジタル印刷機よりも深みがありますし、グレーも非常にニュートラルです。グレーは写真の基準になる色なのでこれがぶれると大きく印象が変わります。

ほかのデジタル印刷機でCMYKかけあわせのグレーを出力すると色が転ぶことがありましたが、DreamLaboでは色の転びや不安定さがないので、部数の多い出力や、追加注文による再印刷でも、安定した色を出すことができます。

関 ● 色ムラがないことも強みですね。これまでの液体トナーを使ったデジタル印刷機は色ムラも多く、薄いグレーのベタなどはうまく印刷できませんでした。

そのため、追加注文のたびに同じ色を出すことが大変だったのですが、DreamLaboならその

ような心配はいりません。非常に効率的に出力することができます。

— 製本適性はどのように評価されていますか?

関 ● ペラ丁合でも強度面でまったく問題ありませんし、作業工程面ではこれまでのフローよりも効率的になりました。というのは、従来のデジタル印刷機のワークフローでは、面付けて出力したものを製本していましたが、DreamLaboではページ順通りに1枚ずつ出てきますから面付けの工程が不要になるからです。

滝澤 ● 従来のデジタル印刷機では、1枚の用紙に何面入るかという部分で苦労していました。

DreamLaboでは、面付けによって断裁して組むという作業がなくなりましたし、カット寸法を自由に設定できるロール紙での出力なので用紙の無駄もなくなりました。

関 ● 製本後の検品作業にかかる時間も大幅に短縮できましたね。液体トナータイプのデジタル印刷機で印刷したものは、画像をすべて検品していましたが、品質が安定しているDreamLaboでは検品にかかる時間はわずかです。

滝澤 ● これは「インクジェット印刷と専用紙」という組み合わせだからこそだと思いますね。用紙に汎用性があるデジタル印刷機では、出力評価を印刷会社がする必要がありますから、検品には神経を使います。用紙によって、インクの定着の問題や紙そのものの黒点(不純物)が含まれている場合がありますから。

関 ● 単純な印刷スピードではほかに速いデジタル印刷機もあります。しかし、フロー全体を見たとき、トータルではDreamLaboのほうがメリットは大きいです。

— DreamLaboが対応する用紙が専用紙のみであることについてはどのように感じましたか?

関 ● B to C向けのフォトブックサービスでは選択可能な用紙を固定していますから、専用紙のみの対応であることは問題ではありませんでした。光沢かマット調か、どちらかを選んでいただくかたちで運用しています。今後はもっといろいろな用紙、製本方法を展開できるようにしていきたいと考えています。

滝澤 ● この画質を手に入れるためなら、専用紙であることも受け入れられますし、ユーザーにも受け入れてもらえると思います。紙の質感を求められることもあります。ユーザーは「受け取ったときにきれいと感じられるもの」を求めているのだと思います。

— DreamLaboの運用コストについてはどのように感じますか?

関 ● 当社がB to C向けに展開しているフォトブックサービス「PhotoRevo」では2016年年頭

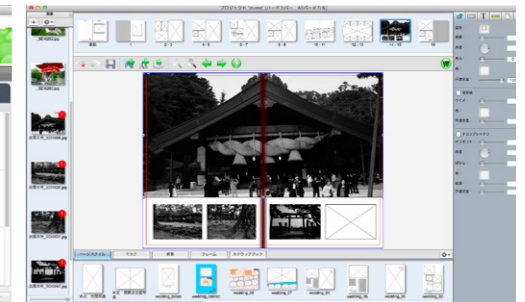


左: B to C向けフォトブックサービス「PhotoRevo」

<http://www.photorevo.net/>

右: アートブック作成サービス「TrueART」

<http://trueart.jp>



自社開発のレイアウトアプリケーション「PhotoRevo」はコストダウンを助け、リピート率向上に貢献している

から、出力をすべてDreamLaboに切り替えています。従来の液体トナータイプでの印刷での価格設定から変えていません。

画質がきれいになったのなら価格もあがるのではないと思われるのですが、DreamLaboの品質が安定していること、後工程での省力化ができること、ロス率が低いことを考慮するとトータルの運用コストは高くありません。

滝澤 ● BtoC向けフォトブックサービス「PhotoRevo」では、自社開発のレイアウトソフトも無償提供しています。これは自由に編集してもらってフォトブックを発注するというしくみで、自社のサービスとしてはいままでになくくらい伸びています。そこに、この画質が加わったことで、より多くのユーザーに満足していただければ、この市場はさらに広がっていくのではないかと思います。

関 ● 少しPRさせていただくと、「PhotoRevo」のアプリケーションだけでなく、ECサイトの構築やサーバの運営まで、外注することなくすべて社内で行なっています。製本も自社内でできるので、発注から発送まで3営業日を実現しています。こうした体制によってコストダウンができています。品質を含め、コストパフォーマンスではどこにも負けない自信があります。

デジタル印刷機によるオンデマンドのノウハウやアプリケーション、サーバ開発といったデジタル的なところと、製本というアナログ的なところを両方持っているのが、自社内であらゆることができる。これが当社の強みですね。

— DreamLaboを今後、どのように活用される予定ですか?

関 ● まずは、B to C向けサービスで狙えていなかった、ハイアマチュアやプロフォトグラファーにアプローチしたいです。当社の「カレンダー研究所」というカレンダー出力サービスも今年からDreamLaboに切り替えていきたいと思っています。あとはフォトブック以外にも自社内でできるユニークな商品開発をしていきたいですね。単に写真を出力しますというだけでなく、違ったかたちで眠っている写真を引き出したい。DreamLaboがあれば、アイデア次第でいろいろな展開ができると考えています。



関 武士
Takeshi Seki
ダンクセキ株式会社
代表取締役社長



滝澤 秀憲
Hidenori Takizawa
ダンクセキ株式会社
統括工場長

DreamLaboを使用したB to C向けフォトブックサービス「PhotoRevo」では自社の製本技術を活かし、ケース付きの並製本、上製本をさまざまなサイズで展開している